

漢学から東洋史へ

日本近代史学における内藤湖南の位置

葭森健介*

序言

私たちはなぜ内藤湖南に注目するのであろうか。日本における戦後の中国史研究は中国史を停滞としての側面にとらえたこと、近代化に成功した日本の対極として中国を位置づけたことの反省から出発した。その結果、中国史を西洋史と同じく、古代から近代へ段階的に発展するとの視点により、時代区分を行うという傾向が強まった。その際に注目されたのが経済史、特に「唯物史観」による発展段階を一つの基準とする考え方であった。しかし、中国史を発展の相にとらえる研究は戦前にもあった。それが内藤湖南の文化史に注目した時代区分である。

湖南は東洋史に発展という視点による時代区分を最初に持ち込んだ学者である。のみならず、彼の時代区分に関する指摘は戦後も依然として様々な影響を与え続けた。特に六朝隋唐の「貴族」政治から宋以降の「君主独裁」政治への変化を中世から近世への展開とする湖南のいわゆる「唐宋変革」についての指摘は六朝隋唐、宋代史研究にとって、避けて通ることのできないものである。「貴族」に関する研究が戦後80年代まで六朝史研究の中でも中心的地位を占めていたことから湖南の研究の影響の大きさをうかがい知ることができよう。ただ、戦後の「唯物史観」の時代区分の発想と湖南の時代区分を単純に結びつけることは困難であった。たとえば、六朝貴族制研究では、貴族制社会を支える背景を経済史的要因で説明しようと、「貴族」を「豪族」と結びつけ、大土地所有との関わりで理解しようという動きもあった。しかし、経済的実力を誇る豪族勢力が「濁」のレッテルを貼られて、「貴族」の世界から排除され、「寒門」の地位に押しやられていたことからしても、大土地所有と貴族制とが単純に結びつかないことは明白である¹⁾。では、なぜ湖南が「貴族」を中国中世のメルクマールとしたのか。彼の時代区分の背景にある歴史観、理論は何なのか、湖南の「歴史観」を分析し、他の歴史理論と付き合わせることなしには戦後の学問成果と湖南の研究を結びつけることは困難なように思わ

* 徳島大学総合科学部教授

1) 拙稿「中国史における貴族制研究に関する覚書」(『名古屋大学東洋史研究報告』7号、1981)「中国史における「社会」と「人間」の把握をめぐる——共同体、地域社会、モラル・エコノミー——」(『中国——社会と文化——』7 1992)等参照。

れる。

湖南の死後70余年を経た現在、彼自身の生涯、思想背景等もふまえた歴史家としての内藤湖南研究が盛んになった。すなわち、彼の学問を通じて、明治から大正という時代の文化を明らかにしようという試みである²⁾。歴史家としての湖南を研究することは、私たちが今なお依拠している中国史研究の原点を探ることに他ならない。今回のシンポジウムもこうした意図が含まれているものと理解し、今回の報告では、私自身のこれまでの湖南研究をふまえ、明治という時代の中で彼がどのようにして東洋史の時代区分にたどりつくに至ったかについて、整理してみたい。

1 明治初期の歴史学に課された課題

内藤湖南は父内藤調一（十湾）の下、漢学の素養を積み、それが彼の学問の基礎となっている。そもそも日本においては歴史編纂に対して漢学の果たした役割は極めて大きい。日本においては国家による最初期の歴史書『日本書紀』以来、『続日本紀』等五書を合わせた六国史は漢文で書かれた。その後『大鏡』等の鏡物や『愚管抄』『神皇正統記』などの歴史書は和文で書かれるようになったが、江戸時代になると再び儒学者によって日本の通史の編纂がおこなわれるようになる。江戸時代に編纂された『本朝通鑑』、『大日本史』等は儒学、特に幕府の保護を受け、急速に広まった朱子学の影響を大きく受けている。江戸の漢文で書かれた歴史書には朱子が『通鑑紀時綱目』の著作を通して、歴史を鑑として現在を投影し、そこから教訓を得、時勢をただそうとした態度に習い、大義名分をただすという姿勢もあった³⁾。こうした歴史書に儒教道徳を持ち込み政治の得失を論じようとする態度、特に伝説の堯舜禹という聖人君主が統治した時代を三代と呼んで理想化して、現在の社会問題を批判とする「是古非今」の姿勢は明治に入って西洋の学問を学んだ学者たちの批判的となる。蘭学から出発し西洋文明の受け入れることを強く主張した福沢諭吉は明治5年（1872）に出版した『学問のすゝめ』の第一編で以下のように述べる⁴⁾。

学問とは、ただむづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るな

2) 湖南の総合的な研究としては内藤湖南研究会編『内藤湖南の世界』（河合文化教育研究所刊、2001）、J. A. フォーゲル『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』（平凡社 1989）、『内藤湖南の世界』、及び同書所収拙稿「内藤湖南と京都文化史学」、『河合文化教育研究所研究論集』第5集 内藤湖南研究特集——学問・思想・研究、2008及び同書所収拙稿「内藤湖南の『文化史』について」等参照。

3) 尾藤正英「日本における歴史意識の発展」（『岩波講座 日本歴史』別巻1 1968 所収）、頼惟勤「中国と日本の史学」（『中国文化叢書9 日本漢学』大修館書店 1968所収）等参照。

4) 『学問のすゝめ』は1872年から76年にかけて刊行された。国立国会図書館の近代デジタルライブラリー所収の明治13年第二版による。

ど、世上に実のなき文学を云うにあらず。これ等の文学も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古来世間の儒者和学者などの申すやう、さまであがめ貴むべき者にあらず。……されば今^{かか}斯る実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。……地理学とは日本国中は勿論世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て其の働を知る学問なり。歴史とは年代記のくはしき者にて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたる者なり。修身学とは身の行を修め人に交り此の世を渡るべき天然の道理を述たる者なり。是等の学問をするに、何れも西洋の翻訳書を取調べ、大抵の事は日本の仮名にて用を便じ、或いは年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押え、其事に就き其物に従い、近く物事の道理を求め今日^{もとめ}の用を達すべきなり。

彼は漢学、国学を「実なき学問」と批判し、実学を勧める。そのためには「西洋の翻訳書」を手本として、才能ある若者には欧米の言語を学ばせ、事実に従い道理を求め、実用的な学問とすべきという。歴史とは「万国古今の有様を詮索する」ものであって、道楽でもなければ、過去の史実に対し主観的に毀誉褒貶を加えるものでもないという指摘である。

では当時の歴史はどの様に記述されていたのであろうか。『学問のすゝめ』の書かれた明治5年は丁度学制が發布され、これに合わせて小学校の歴史教科書『史略』が編纂された年でもある。『史略』は皇国、支那、西洋の三部からなり、皇国は後に万葉集研究者として有名になる国学者の木村正辞、西洋は蘭学を学び幕府からオランダ留学に派遣され最も早く世界の地理を紹介した『輿地誌略』を著した内田正雄の手になる。また、支那の部については国会図書館の目録によれば漢学者那珂通高の著作とされている⁵⁾。当然のことながら、この日本最初の歴史教科書はそれぞれ、江戸の国学、漢学、蘭学の伝統を色濃く残している。

支那の部は各王朝ごとに帝王の名を表題として、簡単な説明を加えたものにすぎなかった。たとえば秦については始皇帝の名を挙げ、郡県制の成立、詔という言葉の始まり、皇帝の称号の導入とその政治の概要を記すにすぎない。さらに漢（前漢）では高祖、恵帝、文帝、景帝、武帝、昭帝、宣帝について書かれる。文帝については「恭儉にして政務よく行なはれ海内安寧、人ごとにところをえたり」、景帝は「呉楚の乱ありしかど遂に太平に属す」、武帝は「兵をおこし匈奴を撃ちつとめて国疆をひらきしが民力もまたこれによりてつかれたり」、宣帝は「精をはげまし治をなせり」とそれぞれの皇帝の政治に対する評価が書かれる。つまり、それぞれの

5) 『史略』（文部省刊、1972）。徳島大学の所蔵されているものは見返しに「官許」「宮城県翻刻」の記載がある。おそらく、各県で翻刻し流布されたものと推測される。なお、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーの目録の内容の項目は「内容：1 皇国（木村正辞編）2 支那（那珂通高編）3, 4 西洋（内田正雄編）」となっている。「皇国」には木村正辞、「西洋」には内田正雄の例言、緒言がそれぞれ記される。しかし「支那」の部分については著者名が確認できない。とりあえず目録に困った。

君主の政治から王朝の盛衰を推し量り、これを教訓とするという、江戸の儒学の歴史観を継承している。

その後明治6年(1873)、大槻文彦が師範学校在任中『史略』より、日本の部分を除き、アジアとヨーロッパを抜き出した、『万国史略』を著し、それが翌年編纂者師範学校(東京)、出版者文部省として刊行される⁶⁾。『万国史略』は各王朝ごとに章立てされてはいるが、内容は為政者の政治の概要を簡単になぞっているにすぎない。前漢についてみると「漢ノ高祖劉邦ハ沛ノ人ナリ、寛仁ニシテ、大度アリ、微賤ヨリ起テ、兵ヲ挙ゲ先ヅ秦ヲ滅シ、漢王ト為ル……戦争五年、遂ニ項羽ヲ滅シ、国内ヲ平定シテ、帝位ニ即キ、長安ニ都ス、後高祖ノ后、呂氏政ヲ乱リシガ、陳平、周勃之ヲ平ゲ、文帝ニ至テ、徳ヲ以テ国民ヲ治メ国内安寧ナリ、武帝ノ時、始メテ建元と改元ス、是年号ノ始ナリ、此時、北ハ匈奴、東ハ朝鮮、并ニ南越、西域等ヲ征伐シ、大ニ国疆ヲ拡メ、遠方ノ外国ト相通ゼリ、又賢良才学ノ人ヲ挙ゲ文華^{もつとも}尤盛ナリ」というもので、そこから当時の社会の状況とか、歴史の発展とかは全く伝わってこない。そこに福沢から漢学が「実無き学問」と批判される理由でもあろう。

これに対し、同じ『史略』でも西洋史の部分は福沢が主張する如く西洋の翻訳書を基に書かれ、「年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物」となっている⁷⁾。『史略』の「西洋史略緒言」で内田は以下のように述べている。

歴史を学ぶには先づ地理の大略を記憶し^{きおく}予め何れの国何れに在るを知るを肝要とす。また、年代の数へ方を知るべし。……古今の歴史概ね皆年代を上古・中古・近代の三段に分てり。即ち上古とは世の未だ開けざる初めより紀元五百年までを限る。中古とは五百年より千五百年まで其間凡そ千年とす。近代とは千五百年より今日まで大凡三百七十年間の事を云うなり。然れども此書国を以て分つが故に中古と近代の区別を為すときは反て混雑を生じ易きが故に今之を分たず。

『輿地誌略』を著し、地理に注目した内田らしく、子供たちには西洋の国がどこにあり、それぞれの国がどのような歴史をたどったかを先ず学ばせようと考えた。その上で、歴史とは帝王や王朝によって記述されるのではなく、紀元すなわち年代によって記述されるものであること、これを上古、中古、近世とわけて記述されるものであることを述べる。

そこで『史略』は西洋史を「上古歴史」と「中古以下各国歴史」に分ける。「上古歴史」はメソポタミア、ペルシャ等のオリエントの歴史から説き起こし、ヨーロッパ文明の原点となる希臘(ギリシャ)、羅馬(ローマ)までの歴史を記述する。そして、「中古以下各国歴史」では

6) 師範学校編『万国史略』(1874年1月 文部省刊)、なお冒頭に明治6年8月付けの大槻文彦の例言がある。

7) 注5参照。

ローマ帝国が崩壊後、西欧のそれぞれの地域で国家が形成され、近代にいたる歴史が書かれる。そのため、時代順でなく、アメリカ、トルコを含むフランス、イギリス、ドイツ、オーストリア等西洋の主要国毎に、ローマ帝国崩壊後の各国の成立から、近代へと移り変わってゆく過程が述べられる。内容的には確かに国王を軸とする政治史が中心に書かれてはいるが、ローマ帝国が崩壊して封建制へと向かう歴史、また絶対王政の成立から市民革命への道筋については国王と国民との関係をふまえ記述されている。市民を中心とする近代社会が西洋においてどの様に成立したのか、明治国家が向かうべき方向を西洋を手本に子供たちに教えようという姿勢が、西洋史の部にはかいま見られる。これが「万国古今の有様を詮索」し、「今日の用に達す」という福沢がすすめる「歴史学」の本来の姿と合致する歴史叙述なのであろう。漢学から出発した明治期の歴史学者にとっても、こうした西洋史の著述方法を無視することは出来なかった。

2 考証学から実証史学へ

福沢等から封建体制を維持するため、実証性の乏しい、実用性のない学問と指摘された漢学ではあるが、漢学にも考証を重視するという、古文辞学派、考証学以来の伝統があった。明治新政府は、自己の歴史的正当性を示すために、鎌倉以降途絶えていた朝廷による国史編纂を計画した⁸⁾。明治2年2月史料編輯国史校正局が作られ、国学者と共に藤野正啓・岡松辰・頼復等の漢学者もそれぞれ御用掛としてあつめられた。後に明治8年修史局副長となり、歴史学者を束ねたのが漢学者重野安繹である。重野は『大日本編年史』の執筆に当たり『春秋左氏伝』『資治通鑑』といった中国の編年史に体例を求めたが、儒教道徳的な基準で史実に毀誉褒貶をくわえる「春秋の筆法」や歴史を「鑑」としてとらえる歴史観とは一線を画している。重野は『太平記』の資料的価値に疑問を呈し、児島高德の後醍醐天皇への忠誠を褒め称えたようなエピソードを史実でないと排除した。近代の歴史学は科学であり史料批判と客観的な実証によって裏打ちされたものでなければならない。こうした歴史学は明治20年（1887）東京帝国大学文科大学校創設に際し、外国人教師として招聘されたランケの弟子ルードヴィッヒ・リースによって日本に持ち込まれたものとされる。実際重野のこの実証的歴史編纂の姿勢の背景に西洋の実証を重んずる歴史学の影響を受けたものという評価もなされている⁹⁾。

しかし、内藤湖南は江戸の学術の伝統の中に既に客観的な実証を重視する態度が生まれており、それが明治へと展開してゆくことを指摘している。明治30年（1897）、彼は最初の著作と

8) この修史事業については岩井忠熊「日本近代史学の形成」（『岩波講座日本歴史』別巻1所収 1965）及び『東京大学百年史 部局史』第19編 史料編纂所（東京大学1987）が詳しい。史料編纂に関する記述は、以下基本的にこの史料による。

9) 岩井忠熊「日本近代史学の形成」（前掲）。

して日本文化史、特に江戸の文化史に関する『近世文学史論』を出版した。これは前年に大阪朝日新聞に連載した「関西文運論」を改称したものであり、「文学」という言葉が冠せられているが内容は、儒学、国学、医学といった江戸期の学術を網羅的に取り上げ、それを整理し、それぞれの学術相互の関係、及び展開を述べたものである。

この書で湖南は江戸の儒学の流れを以下のように整理する。江戸初期、幕府の庇護を受け広範に広まったのは朱子学、すなわち宋学であった。これに対し、貞亨・元禄の頃にいたり、朱子による解釈から離れ原典に戻ろうとする動きが生まれる。これが書物を調べることを重視し、師説にこだわることにとらわれなかった伊藤仁斎の復古の学である。また、荻生徂徠も道学（保守的な朱子学）に甘んぜず、経義を古文辞の中に求めた。そして木下順庵も文章は『古文真宝』、詩は唐詩を尊重し、経学も朱子学が重んじる『近思録』でなく『十三経注疏』を精読すべきと唱えた。この木下順庵門下から新井白石が輩出する。白石は三礼（儀礼、周礼、礼記）、日本の歴史記録を調べ、政治に役立たせようとした。また、『古史通』を書くに当たっては古語の研究から始め、言葉に意味を厳密にすることからはじめようとした¹⁰⁾。湖南は後に白石について日本において「科学的研究の気分が動いた最初の歴史家として評価している¹¹⁾。こうした実学、博覧の考証学的気風は次第に広まってゆく。また、片山兼山、井上金蛾は漢唐宋明の諸家の良いところを選択しようとする折衷学を唱える。金蛾の弟子吉田篁墩は考証学を広め、安永・天明の頃から長崎を通じて清朝考証学の書籍が直接輸入されるようになったこととあいまって、考証学はいよいよ盛んになった。また、国学も日本の古来の書物を、字義からきちんととらえ直し、その真意を探ろうとする、客観的姿勢より出発し、展開していったことをのべる¹²⁾。

つまり湖南は、福沢が西洋の学術について評価する「一科一学も実事を押え、その事に就きその物に従い、近く物事の道理を求めて今日の用を達す」という学問姿勢が江戸の学術にも存在していたことを指摘し、漢学の伝統から近代的な歴史研究が生み出されると確信していたと思われる。実際この『近世文学史論』発想の根底には清の考証学者趙翼が唱えた地気説、すなわち政権を生み出す気が移動し、それと共に政治の中心地も移動するという考え方がある。湖南は趙翼の中国史に対する見解には一部疑問も呈するが、この発想を日本の文化の中心地の移動という観点で援用する。つまり、江戸時代以前の公家によって支えられ京都を中心としていた文化は、武人政権の確立と共に表面的には江戸に移ってしまったかに見える。しかし、伊藤仁斎や荻生徂徠の学問の革新性は関西に受け継がれ、江戸の後半には関西に学術の活気が戻っ

10) 『近世文学史論』（全集第一巻所収）。この書は『日本の名著四一 内藤湖南』中央公論社刊、一九七一）にも収められており、「内藤湖南の学問とその生涯」と題する小川環樹の解説がつけられている。なお湖南の江戸の学術、清朝の学術の実証的態度と論理的な思考については拙稿「内藤湖南と京都文化史学」（前掲）参照。

11) 内藤湖南「白石の一遺聞に就きて」（『先哲の学問』全集9巻 原著 弘文堂書房 1946 所収）。

12) 内藤湖南『近世文学史論』（前掲）。

てくるという整理がなされている。

実際、漢学の伝統をふまえ湖南に先立ち中国史の時代区分を試み、近代の中国史研究の基礎を築いた人物に那珂通世がいる。彼は南部藩藩儒で先に言及した『史略』の編纂者とされる那珂通高の養子となり漢学の知識を蓄える。後に慶應義塾に学び、西洋的な歴史学の手法も身につけた。彼が明治の学界に衝撃を与えた著作に、伝承による日本の紀年（皇紀）を実証によって検証し、これを約六百年短縮すべきとする『日本上古年代考』がある。明治21年（1888）に発表した（初出は明治11年）。那珂は明治30年に『日本上古年代考』を更に発展させた『上世年紀考』を出す。この説を『大日本編年史』編纂事業に加わった星野巨が支持したことから、漢学者中心の日本史編纂事業に不満を懐いていた小中村義象等国学者達の猛反発を受け、星野が那珂に代わり集中的に批判を浴びることになる。そしてこれ以後日本において紀年論争はタブー視されるようになったという¹³⁾。漢籍を利用しつつ考証によって日本史を研究しようとする漢学者系統と、神話から歴史を始めようとする国学者系統の学者との間でおこった対立であった。湖南はこうした国学者の国史学の実証を無視し、漢籍資料を無視する態度について怒りを込めて以下のように述べる。

尤も中には本国中心主義とは称しながら、平田篤胤等の如く、他の国の古代状態を研究して、それを本国の古代史に比較しようと試みたものもある。然し此の方法はその外形が依然として本国中心主義であるが為に、多数の低能な国学者には、其のきはどい研究法が理解せられずに終ったことが多い。明治以後史学が盛んになったと云っても、やはり此の本国中心主義が依然として国史界を支配して居り、少しきはどい研究法を用ゐると、動もすれば神職および教育家等から道具外れの攻撃を受ける事を常とした。……日本国の成立せる素因を幾分外界の刺激に帰することさへも不都合とし、外国の材料に依って研究することは、動もすれば記録の不確実なる朝鮮の歴史から推究さるゝことは寛容しながら、記録の確実なるシナの歴史より推究さるゝことを務めて排斥する傾きが多かった。それ故日本上古に関する見解の程度は、今日に於ても依然として国学者流の圈套を脱しない。これは今後の研究において、国史上の一大問題とせなければならぬ¹⁴⁾。

実証や考証を重んじて『大日本編年史』の編纂をしたり、漢籍を利用しつつ紀年について考証する漢学の流れを汲んだ歴史学に対し、国学者特に神道家一派は強く反発し、時には政治的な力も利用しつつ、その排除を図っていたのである。歴史研究を始めた明治の中期においてその傾向を実感した内藤湖南は、国史界の狭隘な「本国中心主義」による「神職および教育家」に対し「低能」呼ばわりし、漢学から出発した歴史研究の実証性をより高く評価したのである。

13) 岩井忠熊「日本近代史学の形成」（前掲）参照。

14) 「日本上古の状態」（『日本文化史研究』全集九巻所収）。もとは1919年雑誌『歴史と地理』3-2に発表。

こうした、漢学の実証による中国史研究の一つの到達点が那珂通世の『支那通史』の刊行であろう。

3 那珂通世『支那通史』の到達点

中国史に時代区分を行い、その通史叙述した最初の歴史書『支那通史』は、明治21年から23年にかけて出版された。この書は従来の君主の事績を並べただけの教訓としての歴史、歴史を「鑑」と見て為政者に対し毀誉褒貶を加えるという、中国の古典的史書の書き方に対し、各時代毎に、それぞれの時代の経済や文化にまで記し、各時代の特徴について言及したところに特色がある。もともと漢文で書かれたこの本を書き下しにして岩波文庫に所収するに当たり、序文で和田清はその価値について以下のように述べる¹⁵⁾。

是より先き、維新の大業が成って我が邦の文運が大に開けるや、新興の洋学と共に、併せて東亜の形勢を容易に知るべき簡明なる史書に対する要求が蔚然として起った。この急需に応じて用ひられたのが、在来の元の曾先之の「十八史略」や清の姚培謙・張量星同撰の「通鑑肇要」等である。……併しこれらの史書の説く所は、専ら表面の政治軍事の変遷の大要に止まり、更に深く突込んだ時代の背景や制度文物の沿革等に至っては殆ど全く記してゐない。これでは到底新時代の新要求に適し難いといふので、茲に那珂博士の奮起となり、その苦心経営数年の結果がこの「支那通史」を生んだのである。

和田が指摘する通り、『支那通史』は『史略』『万国史略』が帝王の政治、王朝の興亡に終始するのに対し、上古の第七編「世態及び文事」では家族制度や礼制が、第八編「先秦諸子」では文字通り諸子百家が取り上げられている。また、中世史上の第七編は「制度略」と題され、秦漢三国の官制や爵制について説明されている。これは制度、文物の沿革に言及しようとした那珂の功績といえよう。

しかし、那珂にあっても依然として中国史の柱は政治の動きであって、社会の発展の観点から分析するというレベルには達していない。那珂は『支那通史』の冒頭で時代区分を行う際の考え方について以下のように述べる¹⁶⁾。

15) 那珂道世『支那通史』、もとは漢文で書かれ1889年から90年にかけて刊行された。後に和田清が中心になって翻訳し、1939年に岩波文庫として採録される。なお、宋代部分の記述について那珂と湖南とを比較した研究として小林義廣「内藤湖南『支那近世史』の特色について」(『河合文化教育研究所研究論集』第5号(前掲)がある。

16) 『支那通史』「緒言」。

支那は宇内の旧邦なり。開創以来数千年にして、更々王たり。興亡相踵ぐ。……漢人治を談ずれば、必ず唐・虞三代の隆を称す。三代とは夏・商（殷）・周を謂うなり。其の文化の盛なること、尽く漢人の称する所の如くならずと雖も、而も四隣皆純夷の時に当り、漢土独り礼楽の邦と為り、政教風俗已に美を東洋に擅にす。以って古代開化の一例を觀るに足る。秦・漢以下二千余年、歴朝の政俗は殆ど皆一様なり。文化凝滞して、復た進動せず、徒に朝家の廢興反復するのみ。……然れども其の間治朝有り。乱世有り。秦・晋・隋の如きは暫く一統を為すと雖も、其の業長からず。漢・唐・宋は運祚久延にして、政俗又觀る可き者有り。故に昔人或は之を称して後三代と為す。其の後元・明・清相踵ぎ、皆隆盛の朝たり。此れも亦近世三代と称するに足れり。然らば則ち古三代の後、二十六朝、其の盛世と称す可き者は、即ち兩次の三代なり。故に今編述の便を図り、仮に古今を分つて三大紀と為す。唐・虞三代より六国の秦に併せらるるに至るまで二千余年、是を上世と為す。秦より漢・唐を経て宋・金の衰ふるに至るまで千四百年、是を中世と為す。元初より明を経て今に至るまで六百八十年、是を近世と為す。中世近世は又各々其の三代に因り、分つて三紀と為す。每紀一卷を以って之に充て、以って歴代治乱分合の概略を叙す。庶幾くは初学こいねがわの徒、或は由つて以って我が隣邦開化の大勢を察するを得ん。

つまり那珂は「治朝」と「乱世」の繰り返し、秦漢以下二千余年は「歴朝の政俗は殆ど皆一様なり。文化凝滞して、復た進動せず、徒に朝家の廢興反復するのみ」と述べ、社会や文化の質的展開を認めていない。毀誉褒貶の歴史学から脱却しようとした那珂においてもまだ中国史の質的發展をふまえた時代区分は出来ていないのである。こうした時代区分に対し、内藤湖南も満足できなかったようである。『支那上古史』の中国文化の發展とその反動から東洋史の時代を区分すべきという指摘の冒頭で、湖南は以下のように述べている¹⁷⁾。

さて支那文化中心の東洋史は、随分長い時代を経過して居る。支那人の普通にいふ所をみれば、此頃は黄帝以来四千何百年と紀する者さへある。而して支部には時々革命があり、朝代の連続があつて、之に依つて時代を区分するのを最も便宜として居る。近來西洋に倣ひ、上古史・中世史・近世史と区分するやうになつても、猶ほ上古は開闢より三代まで、中世は兩漢六朝、唐宋は次の一区画、元明清はその次の一区画とするが普通である。しかしこれは東洋全体の支那文化發展よりいへば無意味である。真に意味ある時代区分を為さんとするならば、支那文化發展の波動による大勢を觀て、内外両面から考へなければならぬ。

17) 『支那上古史』（全集11巻に所収）緒言。

すなわち湖南は、「革命」と「朝代の連続」で時代区分を行うことを「東洋全体の支那文化史発展よりいへば無意味」と批判している。また唐宋変革を述べた『中国近世史』の第二章の冒頭でも次のように言っている¹⁸⁾。

支那の近世は何時から始まつたとすべきであるか。従来は多く朝代によつて時代を区劃する方法が行はれたが、これは便利なやうであるけれども、史学的には必ずしも正確とは謂へない。史学的に言ふときには、近世には、たゞ年数から云つて今の時代に近いといふばかりではなくして、必ず近世を形成する内容がなくてはならぬ。その内容が何であるかは次に述べるが、さういふ内容をもつた近世は、これを宋以後とすべきである。而して宋になるまでには、中古より近世への過渡期がある。近世史を明かにするには、この過渡期から考へる必要がある。

ここでもやはり湖南は、「朝代」による時代区分や現代との時間の距離でもって中国史の時代区分を行うことを「必ずしも正確でない」と斥けるのである。そして「真の意味ある時代区分」、「内容」をもつた時代の設定を主張するのである。では中国史を「治」と「乱」の繰り返してなく、いかに「内容」や「意味」を持たせて行くか。そこに湖南の歴史研究の原点があるように思われる。

4 アジアの伝統の再評価

明治初期の歴史学は先述の通り西洋に学び、文明開化を推進しようという機運の下に発達した。これを推し進めた福沢は漢学に強い拒否感を持っていた。彼は「治者は上なり主なりまた内なり、被治者は下なり客なりまた外なり。上下主客内外の別、判然として見るべし。けだしこの二者は、日本の人間交際に於て最も著しき分界を為し、あたかも我が文明の二元素といふべきものなり」と明治に至る以前の日本の社会が治者と被治者の二元素から成り立っていることを指摘し、こうした社会を生み出した背景に儒教道徳があったと考える。そうして「政府の専制、これを教る者は誰ぞや。たとい政府が本来の性質に専制の元素あるも、その元素の発生を助けてこれを潤色するものは、漢儒者流の学問にあらずや」、「この病毒の勢いを助けたる者は誰ぞや。漢儒先生もまた預て大に力あるものなり」¹⁹⁾と、儒教及び儒学者を厳しく断罪する。こうした、儒教に対する批判的態度は『日本開化小史』を著した田口卯吉も同じである²⁰⁾。彼は福沢とは違い治者と被治者（人民）との間の断絶に注目しつつも、江戸時代に完全ではない

18) 『支那近世史』（全集10巻所収）第2章。

19) 『文明論之概略』（岩波文庫 1995 所収、初版は1875年）第9章「日本文明の由来」。

20) 岩井前掲論文1章「文明史学」。

が「開明の現象」が現れたことを指摘する²¹⁾。しかし徳川の封建制度は儒教道徳、すなわち「忠義の教え」によって維持され、「徳川時代に行はれたる孔孟の教は忠義の事に切なること却て純粹なる孔孟の教より甚し」いものがあったとして、福沢と同じく儒教及び儒学者を開化を妨げたものと位置づける²²⁾。確かに儒教にも「王室（天皇）」への忠義、いわゆる勤王への指向も見られたが、これを倒幕へと導いたのはやはり「米洲の黒船太平洋を越えて我浦賀に著し通商貿易を請求したること」と、日本の独自の発展より、西洋の衝撃によって明治維新への道が切り開かれたとする²³⁾。この文明史観の立場に立つがぎり、中国及び明治以前の日本の歴史は積極的評価の対象とはならないし、発展の道筋も浮かび上がってこない。湖南が東洋史への評価を高めてゆくためにはまずこうした文明史観の漢学に対する否定的な評価を変えてゆく必要があった。

そもそも、湖南は当初から東洋史研究を目指していたわけではない。秋田の師範学校を卒業して教員の道に進む。しかし、二十才の時上京して英語を学ぶかたわら、ジャーナリストとしての仕事を目指す²⁴⁾。そして、本格的に中国史研究に取り組む以前、日清戦争が始まり、日本軍が快進撃を続ける中の明治27年（1894）11月、勤めていた大阪朝日新聞に「日本の天職と学者」という評論を掲載する²⁵⁾。その中で湖南はまず日本文化が中国文化の影響の下で発展し、開化してゆくという過程を説明する。

蓋し王代の隆治は、唐の文物を受けて、而して之を融化し、江戸の盛世は、宋明の學術を伝へて、而して之を含咀し、皆因て以て国家特色の文華を援起し、各其美観を極めたり。其教義の世道人心を綱紀する者、王代は則ち佛教ありて、伝來十宗の外、法然の専修念仏、日蓮の題目、新たに機軸を出し、江都は則ち儒学ありて、尊王攘夷の論、忠孝仁義の談、自ら王政中興の基を成し、其の美術の国民の品位を崇うする者、寧樂の彫像、印度に非ず、希臘に非ず、隋唐に非ず、清秀温雅、別に所長を見し、巨勢氏、土佐氏の唐画を変じ、狩野氏、雲谷氏の宋元画を承くる、光琳氏、円山氏の新手法を開ける、髹漆の東山に盛んに、陶磁の徳川に進める、乃ち伎楽雅楽の隋唐の旧を存して、寧樂平安の間、金声して而して之を玉振せる、平語謡曲の足利氏に出で、小唄浄瑠璃の徳川氏に発達せるに至るまで、衆伎雑流、凡そ所謂開明せる社会の当さに有るべき所、殆んど有らざることなし。

21) 『日本開化小史』（前掲）第11章「徳川氏治世の間に世に顕れたる開化の現象」。

22) 『日本開化小史』（前掲）第12章「徳川氏治世の間に世に顕れたる開化の現象」。

23) 『日本開化小史』（前掲）第13章「徳川氏治世の間勤王の気発せし事」。

24) 全集14巻所収「年譜」、及び「書簡」。

25) 「日本の天職と学者」（『近世文学論』全集第1巻所収）。

まず平安（王代）の文化が唐の文物、江戸が宋明學術の影響をそれぞれ受けた。そして、そうした中国文化を咀嚼消化したことで江戸（江都）で儒学が盛行して尊王攘夷の論も起こり、明治維新（王政中興）の基になる。また中国の美術を消化した結果奈良、平安に日本独自の仏像彫刻がおこり、巨勢、土佐、狩野の各派の美術が作られ、尾形光琳や円山応挙の絵画を生む。漆芸、陶磁も日本の特徴を帯び、中国から伝来した伎楽、雅楽も日本的に消化して平曲や謡曲、小唄、浄瑠璃を作り出したと述べたのである。湖南は日本の學術文化が中国の影響の下で発展した点を確認した上で、それを日本人が咀嚼、消化、吸収したことに注目したのである。湖南は伎楽雅楽を隋唐の文化を受けた「旧」いもの、宋元画を受け入れた戦国後期から江戸の絵画を「新」しいものと、隋唐文化と宋元明文化の間に展開、発展の相を認める。そして、「江都は則ち儒学ありて、尊王攘夷の論、忠孝仁義の談、自ら王政中興の基を成」したと福沢が徹底的に排斥した儒学思想に明治維新の基盤があったと指摘するのである。湖南は文明史観が江戸を否定し、明治維新の意義を高く評価しようとしたのに対し、宋元明時代に起こった新しい文化を受けた江戸の文化を評価し、これを明治維新の前提としよう、発想を逆転させたのである。

すなわち、湖南は隋唐と宋元の間文化の変化があったこと、その文化の変化を受け入れた日本文化にも発展があったこと、そうした新しい江戸文化を明治維新の前提として位置づけることで福沢等の漢学や中国史に対する否定的な評価を変えようとしたのである。ただ、それだけでは直接「内容」のある時代区分には至らない。

5 湖南の近世論と時代区分

唐宋変革論を述べた『支那近世史』で湖南は「近世を形成する内容がなくてはならぬ」という。湖南が考えた近世の内容とは「貴族政治が廢頽して君主独裁政治が興ったこと」である。気になるのはこれを総括する部分の湖南の言葉である²⁶⁾。

この貴族政治は、唐末より五代までの、中古より近世への過渡期の中に廢頽し、これに代つたものが君主独裁政治である。貴族廢頽の結果、君主の位置と人民との間が大いに接近し来って、高い官職に就くのに、家柄としての特権がなくなり、全く天子の権力によつて任用されることゝなった。……しかしかくの如く貴族政治から君主独裁政治に入つたのは、どこの国にも見られる自然の順序である。

湖南は貴族政治から君主独裁政治へと移行するのは何も中国ばかりのことではない、「どこ

26) 『支那近世史』（前掲）第2章。

の国にも見られる自然の秩序」というのである。ヘーゲルのように「一人の者が自由」から「少数の者が自由」そして「すべての人が自由」というように「自由」の発展で歴史を考えるのなら、これはそれに逆行する考え方ともとれる²⁷⁾。

この問題を考える上で忘れてはならないのが京都大学の同僚、内田銀蔵や原勝郎との交流である。日本史の内田、西洋史の原は湖南と共に京都文化史学の伝統を築き上げたと言われる。内田、原の二人はともに東大で先述のルードヴィッヒ・リースに歴史を学び、ランケの実証と史料批判を重んじる近代歴史学の手法の洗礼を承けた。その後彼等はヨーロッパに留学し、近代西洋史学を目の当たりにして帰国したのである。こうした西洋史の認識を基礎に比較史的観点から日本史を分析し、日本経済史を専門とした内田は明治36年に『日本近世史』を出版、原も西洋史が専門であるにもかかわらず、内田に触発され39年に『日本中世史』を上梓した。

内田は『日本近世史』で、「足利氏の季世より織田、豊臣二氏の時代を経て、徳川氏の初世に至るまでの間は、一つの時期より他の時代に移る過渡の時代なりしといふべし」、と足利の末から江戸の初期が近世への転換期であると指摘する。それはこの時期の変化が西ヨーロッパの中世から近世への過渡期に著しく類似していることをその理由とする。

第一にこの過渡の時代の著しき現象は、文学の復興なり。……第二にこの過渡の時代の他の著しき現象として、余輩は商工業の発展、都府の発達、及び金銀貨幣流通のようやく盛んなるに至りしことを挙ぐることを得べし。……第三に政治上につきていうも、この間の時代は、顕著なる過渡の時代なりしことを認むべし。それ応仁の乱後解体その極に達し、群雄割拠、各々独立の姿をなし、ほとんど統一する所なかりしといえども、解体その極に達するや統一の気運はおのずから來たれり。……織田、豊臣二氏の功業によりて、海内ついにまた一に帰し、而して徳川氏これを承けて、充分に秩序を確立し、よく久しく持続すべき太平の治を啓くことを得たり。その当時の勢いよりして、未だ封建を廃して郡県となし、真に中央集権的の政治組織を構成するに至らざりしといえども、しかも結合及び統属の関係充分に確立し、事実においてよく全国を統御宰制し得る強固なる中央政府は、ついに建設せられ得たるなり。これ中世の末ヨーロッパの諸国において、王権を盛んにし、中央集権を馴致せんとの一般の趨勢ありしに対比すべきものにして、この点においてもまた我が国民の生活は、この過渡の時代において新たなる時期、新たなる段階に向かい進み行きつつありしことを見るべき也

内田は、文芸復興（ルネッサンス）、都市、商業の発達、そして徳川時代を地方分権から中央集権的な方向へ向かったことを挙げ、江戸をヨーロッパ近世の絶対王政と対比させた。この

27) ヘーゲル『歴史哲学』序論。

ように江戸時代を日本の近世とするという説を導き出す上で、内田は西洋における近世と日本史の比較という視点をを用いたのである²⁸⁾。そして、歴史の後退とも思われる江戸幕府の鎖国政策は「対外活動の時期にあらずして、次に来るべき世界交通の時代において大いに飛躍せんがための準備的修養の時期」にあつて、輸入を減らし金銀を蓄え次の飛躍に備える上で有効な政策と評価される。さらに江戸期はヨーロッパ近世の様に戦争での海外発展という政治外交上では見るべきものがなかったが「人道の進歩と人文の発達」を見たことを指摘し、江戸時代の経済や文化の発展の結果、明治という近代が生まれたとの認識を示した。内田が江戸を近世と呼ぶのには、湖南同様明治という近代を準備したという意味も込められている。

内田もまた、日本の近世文化成立における中国文化の役割についても目を向けた。彼は「宋元明の文物、すなわち近世支那の文化は鎌倉及び室町時代の間、引き続き我が邦に輸入せられたりき。この宋元明の文物たる、すこぶる隋唐の旧文明とその趣を異にする所ありて、その我が国民の上に与えたる影響は、これを先の隋唐文化に比するにすこぶる殊別なるものありしを見る」と述べ、平安を隋唐文化の影響を受けた文化、鎌倉及び室町時期を宋元明文化の影響を受けた時代ととらえ、宋元明の文化を「清新の趣を具えた」中国近世の文化と把握したのである。そして、「これによりて我が国民はおのずから芸術の新たなる趣味を悟得し、精神上新たな感化を受け、ついに文芸復興を馴致」したのであり、「近代日本の文化は、主としてこの近世支那の文物の刺激の下に徐々に発展成形せるもの」との認識を示した²⁹⁾。つまり、内田は宋元明の文化が近世的であり、それを輸入することによって、隋唐の影響を受けた平安文化を乗り越え、日本の近世（江戸）の文化すなわち「文芸復興（ルネッサンス）」がもたらされたと考えたのである。

近世文化を平安文化の克服の結果とし、それを江戸期ととらえる見方は原勝郎にも共通する。西洋史を専門とする原も『日本中世史』『東山時代における一縉紳の生活』という日本史研究に影響を与える事になる著作を残した。彼は「此時代（鎌倉・室町）が本邦文明の発達をして其健全なる発起点に帰著せしめたる点に於て、（平安の）皮相的文明を打破して之をして摯実なる径路によらしめたる点に於て、日本人が独立の国民たるを自覚せる点に於て、本邦史上の一大進歩を現したる時代なることは疑ふべからざるの事実なり」との認識を示し、「日本国の、大体に於て此間に顕著なる発達を致せるを認め、徳川時代の太平も実に其余恵なることを信ぜむと欲するなり」と鎌倉・室町の再評価を試みた³⁰⁾。また、三条西実隆の日記をもとに書かれた『東山時代における一縉紳の生活』では、鎌倉から京都に中心が戻った室町時代は復

28) 内田銀蔵『日本近世史』（1903）緒論。1975年平凡社東洋文庫で再刊されている。また筑摩書房明治文学全集78（1976）にも採録される。

29) 同前。

30) 原勝郎『日本中世史』（1920 富山房刊）序。1969年平凡社東洋文庫として再刊された。また筑摩書房明治文学全集78（1976）にも採録される。

古は復古だが新たな復古であり、ある意味で西洋のルネッサンスにも相当する。たとえば、源氏物語をはじめとする物語の受容、連歌に見られる和歌の隆盛、公家達の連歌師宗祇との交流は平安文学の新たな展開という点でルネッサンスに相当し、地方武士との交流、荘園をめぐる武士との棲み分けといった生活は近世へと向かう新しい公家〈縉紳〉の姿を示すものとしてその時代を描いた³¹⁾。

近世とは平安時代に強く見られた古代の要素を克服し終えた時代とする点、近世の特徴を文芸〈文教〉復興と下層階級の地位向上に見いだしている点、その傾斜を固めた時代としての戦国から織豊政権の時期を高く評価するという点で原と内田は基本的に軌を一にする。これらの評価は日本史を西洋史と対比し、西洋のルネッサンスから絶対王政へ向かう時期を近世として意識することによって初めてなしたものだといえよう。

この平安と江戸を対比させ江戸の文化の進歩性を指摘する見方は湖南の「日本の天職と学者」、『近世文学史論』における認識に酷似する。というより内田の『日本近世史』自体が湖南の『近世文学史論』を継ぐ著作と評価されたという³²⁾。ただ、京大着任前の湖南の著作では日本の文化と中国文化の発展を平行させてとらえることで、近世という概念を引き出していた。更に、この内田や原の西洋史との比較で近世をとらえるという視点が加わることにより、宋代の庶民文化、宋代の君主独裁政治の進歩性を評価し、宋代近世論を確立するに至ったと考えられるのではなかろうか³³⁾。

ただし、絶対王政を近世の特徴とする見方は、明治初期の「文明史観」のヨーロッパ文明に対する理解に既に現れていた。福沢諭吉は明治7年に発表した『文明論之概略』で封建制から次の時代への移行を以下のように述べる³⁴⁾。

ここには、仏蘭西の学士ギゾー氏所著の文明史及びその他の諸書を引て、その百分の一の大意を記さん。……野蛮暗黒の時代漸く終て、周流横行の人民もその居を定め、ここに於いてか、封建割拠の勢いに移りたり、……この時代をフヒューダル・システムの世と称す。……国内の武人、諸方に割拠して一の部落を成し、山に拠りて城を築き、城の下に部下を集め、下民を奴視して自から貴族と称し、現に独立の体裁を備えて憚る所なく、武力

31) 原勝郎『東山時代における一縉紳の生活』（もとは1920年の講演）。1941年創元社から刊行され、1978年には講談社学術文庫として再刊された。

32) 宮崎道生『近世の日本・日本近世史』（内田銀蔵著、平凡社東洋文庫、1975年）解説参照。

33) 漢学から東洋史へ湖南の近世論が原や内田から影響を受けていた可能性については、増淵龍夫、J. A. フォーゲルによって指摘されているが、具体的にどの点について、どのような影響を受けていたかについては言及されていない。増淵「日本の近代史学史における中国と日本Ⅱ」（『歴史家の同時代的考察について』岩波書店 一九八三所収、原載『思想』四六八 一九六三）、フォーゲル『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』（前掲）。

34) 『文明論之概略』第4巻8章「西洋文明の由来」（前掲）。

を以て互に攻伐するのみ、……右の如く封建の貴族、独り権を専らにするに似たれども、決してこの独権を以て欧羅巴全州の形勢を支配するにあらず。宗教は既に野蛮の人心を籠絡してその信仰心を取り、紀元千百より二百年代に至りては最も強勢を極めたり。……この時代（王政の成立期）にありて王室に権を集めることは、仏蘭西のみならず、英国、日耳曼（德国）、西班牙の諸国に於てもまた皆然り。その国君のこれに勉めるは固より論を俟たず。人民もまた、王室の権に籍りてその讐敵なる貴族を滅ぼさんとし、上下相投じてその中を倒すの風と為り、全国の政令漸く一途に帰して、やや政府の体裁をなすに至れり。

これは、民衆勢力が国王の権力と結合することによって倒され、絶対王政が打ち立てられ近世へと向かうというギゾーの歴史理解を説明したものである。福沢が根拠とするギゾーの『ヨーロッパ文明史』は明治7年から8年にかけて永峰秀樹によって英語版から、明治8年には室田充美によってフランス語の原著から翻訳されるなど明治初期においてかなり注目された著作と思われる³⁵⁾。永峰の翻訳によって、この部分のギゾーの著述を要約すると「封建政体」は、「市邑」が「其自由を得んと一時に各領主に反したる」事件に遭遇する。こうして成立した「自由市邑」は十字軍を経て、力を増す。一方で王権政体も「国家の治安を保護するに無双の一勢力たる政体」へと変化する。王権は「国安、公義、公利の三事の受託者となり」、人民の「親愛を得て、人民の勢力を集合して自己の勢力となした」。すなわち、王権と封建領主に抑圧されていた民権が結びつき、封建領主を排除して「王権政体」が成立する。こうして「政府・人民の二者に帰した」ヨーロッパは様々な経過を経て「専制」と「自由」の二者の対立に至る。そして、この対立こそがフランス革命生み出す根源であったということになる。湖南が「どこの国にも見られる自然の順序」という「貴族政治」から「君諸独裁政治」への移行とは、まさに封建制社会から絶対君主政への展開を意識したものでなかったのだろうか。そしてその先にあるのが「政府」と「人民」の対立の末生まれる「共和政」と考えると、彼の『支那論』における唐宋変革から辛亥革命へいたる歴史の流れ、共和政の必然性も理解しうるのではないか。

すなわち、湖南の歴史学は江戸漢学の古文辞学、古学や清朝の考証学の伝統を積極的に評価し受け継いだこと、西洋の時代区分論、特に近世論を認識したことでその地位を築いたといえよう。

35) ギゾーの書は『ヨーロッパ文明史』として、1948年安土正夫がフランス語の原書から翻訳した（世界古典文庫 日本評論社刊、後1987年みすず書房再刊）。現在日本ではこの翻訳書が読まれる。また、永峰の訳は『日本近代思想体系 15 翻訳の思想』にも収められている。ギゾーの『欧羅巴文明史』の明治史学に与えた影響については拙稿「中国貴族制研究の原点」（『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第16巻 2006）参照。

結びに代えて

湖南の歴史学はある意味で西洋文明に対する日本の遅れをアジアの伝統に帰す福沢等の文明史観の学者、その逆に天皇の権威を高め、それをてこに明治政府の基盤を固めようとする国学者との葛藤によって生み出されたともいえる。

豊前中津藩の下級武士の子に生まれ、封建的身分制度の体制下苦勞し、「私のために封建の門閥主義は親の敵で御座る」とまで言い切った³⁶⁾、福沢が明治維新を迎えた時点で、アジアの文明を否定し、文明開化を説くにはそれなりの理由があろう。また、強力な中央集権国家を目指す明治政府の教育を支えるために、神話を持ち出した国学者にも彼等なりの言い分があろう。

日清戦争の戦果にわく中で「日本の天職と学者」が書かれた。そこで、湖南は日本の文化の特徴がかつては中国、そして現在は西欧と外来文化を咀嚼・消化・吸収したところにあること、そうした力を利用して新しい「坤輿文明（世界文明）」の中心となるべき新しい学術の創出を目指すことが日本の「天職」であり、学者の使命であると説いた。この立場は一貫して貫かれた。大正10年に行った講演で湖南は「世界の最も完全なる文化を形作る為には、自分で従来有って居った文化の価値を十分認めて、さうして何処までも其長處を保持して、更に他の長處も十分取入れるといふことが必要であって、自分の文化に心酔して、他の文化を全く排除するといふことは、決して最良の手段でないと思ふのであります」³⁷⁾とのべる。

西洋を無批判に評価する文明史観と狭隘化する国学流の国史学の谷間から生まれた湖南の歴史学は歴史事象の一面だけを恣意的にとらえるのでなく、幅広く客観的に分析しようとする特徴も併せ持つ。近年、ややもすると偏狭なナショナリズムが首をもたげ、嫌中の論調や歴史認識問題などを引き起こしているが、こうした時、湖南の歴史に対する態度を振り返るのも意味あることではなかろうか。

36) 『福翁自伝』「幼少の時」(岩波文庫 一九七八所収 元々は一八九八年脱稿、一八九九年 時事出版社刊)

37) 「日本文化とは何ぞや（其の二）」(『日本文化史研究』全集9巻所収)。もとは1921年講演。